

電照による露地夏秋小菊の開花斉一化の実証

農業技術振興センター 農業革新支援部

【普及活動のねらい・対象】

短茎小菊栽培の省力化を図るため、機械による一斉収穫を検証してきました。しかし、お盆前に咲く夏秋ギクは、「開花時期がばらつき、蕾が固いことから、出荷できない切り花が多く残るため、低い出荷率(約6割)である」という課題がありました。

そこで、夏秋ギクの施設抑制栽培に利用されており、開花揃いを改善できる電照技術を、露地栽培において実証しました。

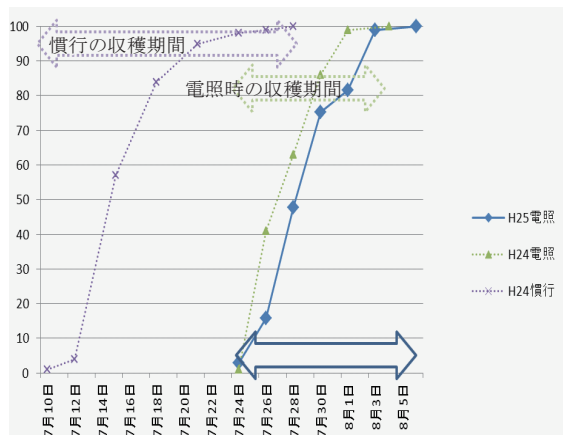
【普及活動の内容】

(1) 実証ほの概要

- 24～25年度の2か年、甲賀市水口町の露地小菊の栽培ほ場に実証ほを設置しました。
- 光源には屋外で使える21W蛍光灯を使用し、乗用管理機で農薬散布ができるように、地上高1.5mで、2.5m間隔に設置しました。
- 電照は、定植日から6月中旬までの期間、夜22時から未明3時の5時間点灯しました。
- 光源による隣接水稻への出穂遅延防止のため、境界の畦畔に寒冷紗を張りました。

(2) 実証ほの結果

- 短茎小菊の特需期である「7月末から8月初旬」を出荷時期にできました。
- 開花時期も揃い、24年度の実証期間はこれまでの19日間に比べ14日間となり、5日間短縮しました(右グラフ)。
- 25年度は、さらに省力化を図るため、収穫が半分程度進んだ時点で、ほ場の一部を一斉収穫しました。蕾が固く、即日出荷できない切り花は開花室(空調調節)で市販の開花液を用いた水揚げにより、9割以上の高い出荷量となりました。



収穫進捗率の推移

【普及活動の成果】

開花期が揃うことや、9割以上が出荷でき、省力化も可能なことから、展示ほ設置農家から高い評価が得られており、次年度以降、複数の品種において露地電照が拡大されます。

電照による開花調整は、開花を揃え、需要期の集中出荷につながる技術として、市場評価の向上が期待できるため、「滋賀県花き園芸協会きく部会」の研修会等において情報提供を行って、需要期に確実に出荷できる産地体制の強化を支援します。